

なでお金を出し合って会社組織をつくったわけ。で、次の年、日本でいえば表参道みたいな当時の最先端のファッションストリート、キャピュシーヌ大通りで、はじめての展覧会を開いたんです。

促した結果、「じゃあ、『印象、日の出』にしておいて」みたいな軽いノリでつけられたらしいんだよ。



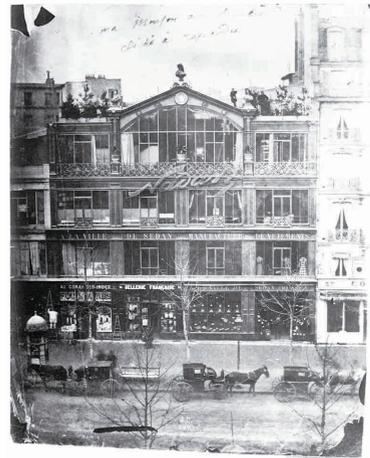
マネ『すみれの花束をつけたベルト・モリゾ』(第4章再掲)

アシ 最初の展覧会が表参道って、すごいですよね！

五郎 ナダール^{※2}という超有名なカメラマンがいて、彼のでっかい写真スタジオが通り沿いにあったので、それを借りたわけ。この本でも、彼が撮影した何人かの肖像写真を取り上げてます。で、こちらがその写真スタジオ。ここで、1874年4月15日から5月15日まで、のちに第1回印象派展と呼ばれることになる記念すべき展覧会が開かれた。モネの『印象、日の出』はそこに出品されたわけだけど、この印象的なタイトルは、実は、直前まで決まっていなかった。



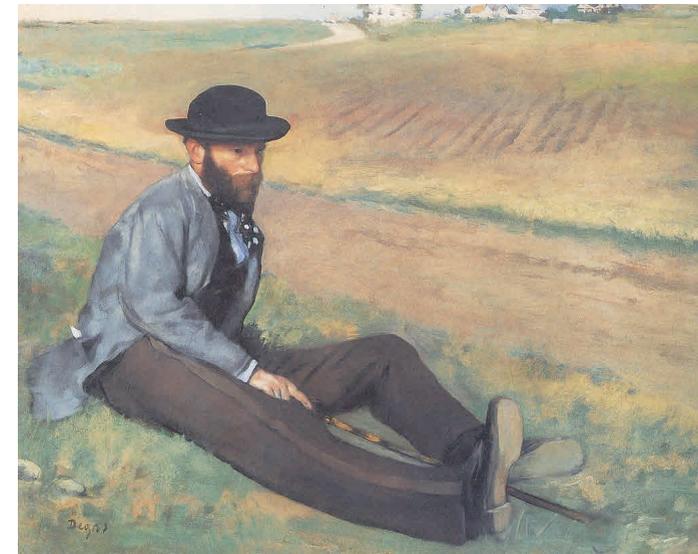
ナダールのセルフ・ポートレイト(1854-55年頃、本人撮影)



ナダールの写真スタジオ(1860年、本人撮影)

アシ そうなんですか？

五郎 マネ先輩の弟で、第1回印象派展にも作品を出したベルト・モリゾ(第13章参照)の夫でもあるウジェーヌ・マネ(113ページ参照)が、展覧会のカタログを制作する係だったんだけど、ウジェーヌがモネに「早くしないと印刷が間に合わないぞ」と催



ドガ『ウジェーヌ・マネ』(1874年、油彩、63×79.5cm、個人所有)

“ 実はディスられていなかった!? ルイ・ルロワによる記事を読み解く ”

五郎 その『印象、日の出』を見たルイ・ルロワ^{※3}という画家で評論家が、「ル・シャリヴァリ」という新聞で「描きかけの壁紙のほうがマシ」

※2 ナダール(1820-1910年)：フランスの写真家、風刺画家。語尾に何でも「ダール」をつけたがる口ぐせから、本名トゥールナションをもじってトゥールナダールと呼ばれ、やがてナダールを自称するようになる。肖像写真家として人気を誇っただけでなく、気球に乗って世界初の空中写真も撮影した。

※3 ルイ・ルロワ(1812-1885年)：フランスの画家、版画家。サロンに何度も入選するほどの腕前だったが、第1回印象派展の印象を記した「印象派の展覧会」という記事によって現在に名を残す。